

イラク戦争再考

Reflections on 'Post'-Iraqi War

佐々木 寛*

戦争の日常化とペシミズム

最近、あまりにも目まぐるしく事態が進行するので、せめて少しは立ち止まって考えてみたいと思うが、なかなか思考が定まらない。2003年3月20日にはじまった「イラク戦争」は、「アフガン戦争」に続き、米国の「対テロ戦争」の大義名分で決行された。アフガニスタンの時と同様、無数の人々の生命や生活が犠牲になった。しかしその後、戦争遂行の最大の目的であった「大量破壊兵器」はついに発見されなかった。やがて戦争の「大義」は、いつしか「イラク人民の解放」へとすりかえられたが、イラクの人びとが現在本当に暴力や不安から「解放」されているのか、それを証明する事実とはむしろ逆の知らせが断続的に届いてくる。

イラク・ボディカウントというサイトがある¹。イラクでの武力行使で犠牲となった一般市民の数を数え、丹念に記録しているサイトである。2007年3月20日現在、その数は、最小でも59,326人、最大で65,160人に至っている。開戦後すぐに行われたブッシュ大統領による宣言（2003年5月1日）によって、イラク戦争は「終結」したはずであった。しかし「戦争が終わる」ということは一体どういうことなのか。「9・11」以後のアフガニスタンやイラクでの戦争が示したのは、「戦前」と「戦後」というわれわれがなじんだ時間区分の感覚が、もはやあてはまらなくなりつつある現代戦争の姿である。

結局、「イラク戦争」がもたらしたものは、何であったのか。この「第2次湾岸戦争」が「終結」してみても明らかになったのは、すでに「第1次湾岸戦争」の時にも顕在化しつつあった、世界を巻き込む「グローバル化」の素顔である。どうやら世界は、ますます力と金だけがものをいう、野蛮な世界へと一直線につき進んでいるようだ。空爆と「テロ」の応酬。まるで世界から20世紀の人類経験が忘れられてしまったかのように、さらには、人類がことばを獲得する以前にまで歴史が回帰してしまったかのようにである²。

しかし、「9・11」以降の米国および世界各国の「有事体制」化は、まさに「下から」も支えられている。不透明で危険に満ちた時代の中で、少なくとも自分（たち）だけは安全でありたいと願う切迫した大衆心理がグローバルな「有事化」を加速させている。「万が一に備えて外敵から身を守るすべを講じておくべきだ」という「有事」や「安全保障」の論理は、人びとの心を確実に捉えつつある。たとえば、ミサイル防衛（MD）という発想を考えてみたい。それは、近代の安全保障概念が前提としていた相互的な脆弱性をやすやすと否定し、軍事テクノロジーの力によっていわば「絶対的な安全保障」を夢見る構想である。世界が殺伐としているからこそ、予想されるどんな危険からも免れる私（たち）だけの安全な空間が欲しい…。この一種疫学的な「安全」に対する強迫観念は、アメリカの「対テロ戦争」をも根底で支える大衆心理である。

そしてそのような心理の背景に透けて見えるのは、「今頼りになるのは、ことばや信義ではなく、結局は力ではない」という根源的なペシミズムである。戦争によって日々傷つけられているのは、都市や家々ばかりではない。この戦争は、人間の世界を信じる心にも深い傷跡を残したのである。

〈他者〉を失った世界

だが、このように漠然とした不安が蔓延する一方で、私たちは昨日と同じ今日がやってくることも信じて疑わない。「不景気だ」、「戦争だ」といいながら、私たちの日常は何事もなかったように過ぎてゆく。「どこかで人が死んでいるらしい」、「どこかで大惨事があった」ということは、毎日聞かされるうちに、私たちの神経を

¹ <http://www.iraqbodycount.net/>

² Benjamin R. Barber, *Fear's Empire: War, Terrorism, and Democracy*, W. W. Norton & Company, 2003.

素通りするようになる。

「私たちの平和」と「彼らの平和」には関係がない。なぜなら彼らが「戦争」をしていても、私たちは「平和」だからだ。むしろ、「私たちの平和」とは、実は地球の裏側での「戦争」によって支えられているのかもしれない。そしてもしそうだとすれば、「戦争」と「平和」の区別は限りなく曖昧になる。かつてG・オーウェルの小説、『1984年』で描かれたように、「戦争は平和である」³。そんな明るく頹廃した世界の中で、われわれは完全な絶望もできない代わりに、本当の希望ももつことができない。

この「戦争」が日常化する「有事体制」とは何か。それは「脅威」や「不安」の存在を第1の前提にして日常の社会が再形成されるということである。通常、そのような社会においては、普段から常に「危険分子」や「異端分子」がつくり出され、排除される。そしてそのことで集団全体が結束する。その場合、たとえば自分たちにとって馴染みのない〈他者〉は、新しい文化を共に生み出すためのパートナーではなく、むしろ潜在的な「脅威」の源泉とみなされるだろう。そしてその相互不信が極度に深まった場合には、そのような〈他者〉は私たちの財産や生活をつけねらう潜在的な「テロリスト」として排除されてしまうかもしれない。すでに世界各地で起こっている異民族排斥やマイノリティ弾圧の動きは、この〈他者〉が単に国境をはさんで「向こう側」に住む人間であるだけでなく、その多くがまさに内側の世界の住人、つまり私たちの隣人でもあることを示している。戦争は、人びとの未来への信頼を破壊する。そしてそれによって、人びとが境界の外側の〈他者〉と共に生きようとする勇気をも打ち挫いてしまうのである⁴。

「イラク戦争」後、「北朝鮮」に対する異常なまでの脅威論の高まりは、案の定、日本国内においては在日朝鮮人への嫌がらせや暴力へと連動し、この国をさらに小心翼翼たる「安全アレルギー」国家へと変貌させつつある。その過程で、いうまでもなく、「拉致問題」は政治的な質草と化した。私が住む新潟でも、この問題はすでに社会的なタブーとなってしまった。

しかし、「拉致問題」は本来、国際人権問題である。「人権」という普遍概念は、拉致された被害者はもちろんのこと、この世界のすべての人間に保障されるべきものである。しかし、国家によって拉致された人間を黙殺しつつけた日本政府への告発や「拉致国家」への告発が、いつのまにか、北朝鮮への軍事行動や経済制裁というロジックに転換されてしまうのはなぜか。それでは、軍事行動や経済制裁で被害を被る朝鮮の人々には「人権」は適用されないのだろうか。それとも、そういうひどい国家を構成している朝鮮人たちはその報いを受けてもしかたがないというのだろうか。もしそうだとすれば、日本の拉致被害者にも、そういうひどい日本国家を構成している一員として、同じことばが返ってこざるをえなかっただろう。被害者の一人、曾我ひとみさんが、「自分たちの家族を引き裂いたのは誰ですか」と言った時⁵、その問いは20世紀に国家と人間とが切り結んだ不幸な関係についての、きわめて普遍的な問題を提起していた。20世紀に、無数の人間の屍の果てに到達した問いは、「国家は本当に国民を守るのか」「国家を守ることは国民を守ることになるのか」という問いであったはずだ⁶。その経験を少しでも顧みるなら、そして今、拉致被害者に対して「人間として」わずかでも同情を覚えるならば、その同じ人間は、抑圧的な国家体制の中で飢えに苦しむ隣国の弱者にも同じ強度で思いを馳せる必要がある。しかし、「既得権益共同体」としての、即席の民族意識にしがみつこうとする弱い精神は、いつも身近に〈敵〉を発見することでしか結束できない。

ことばと武力

「イラク戦争」後の世界でもっとも恐ろしいのは、当事者、とくにブッシュ政権のエキセントリックな暴力＝戦争至上主義にとどまらない。問題は、世界の問題を考え、論じる際のことばや文脈の根源的な破綻である。ことばが無効であるにもかかわらず、「戦争」という事態だけが先行しつづける事実。そしてその事実こそった世界像や歴史が造成され、それを世界は追認するしかないという事実。しかも世界が、いつの間にかそ

³ ジョージ・オーウェル『1984年』（新庄哲夫訳 早川書房 1972年）

⁴ 丸山眞男『現代における人間と政治』（増補版 現代政治の思想と行動）未来社 1967年）

⁵ 2003年4月14日、新潟県真野町役場における会見にて。曾我ひとみさんは、当時北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）に残した夫と2人の娘や母ミヨシさんへの思いを切々と訴えた手記を読み上げた。

⁶ Rudolph J. Rummel, *Death by Government*, Transaction Publishers, 1994.

れを追認したという事実すらも忘れてしまうという事実。ここにこそ真の恐怖がある。

再びオーウェルの『1984年』を思い起こせば、「戦争が平和である」世界とは、ことばの使用法が革命的な変更を遂げた世界でもあった。戦争が計画されるのが「平和省」であるように、「真理省」では歴史が捏造され、「愛情省」では不信が生産される。「自由」は服従に他ならない。公式のことばが真実とはまったく正反対の意味をもつことによって、民衆は常に「二重思考」の習慣を強要され、永遠に無知と従属の状態に拘束されつづける。だから、ことばの意味も歴史も、その時の権力の都合次第で常時変更される。大事なものは、これまでの経緯や文脈ではなく、「今」だ。すべてが「今」に還元されるために、ことごとく「記憶」は不可能になり、その民衆の「忘却」の上に歴史上これまでなかったような究極の権力が築かれる。

それにしても、この間、いかに多くのことばの意味が書き換えられ、新用法が出現したことだろう。それによって、かつては決して許されなかったことが、いとも簡単に合理化され、実行される。歴史もことばの意味も、時代のうねりや運動の中に飲み込まれ、解消されてゆく。このいわば「全体主義」的な状況は、それがグローバルに展開しているという意味では「グローバルな全体主義」とよぶべきかもしれない⁷。

マスメディアは、それに大きく加担している。「イラク戦争」の報道に見られたマスメディアの大きな誤解は、端的にその「現実主義」と「中立主義」にあった。前者は、戦争報道においては概して「現地主義」と「軍事主義」とを意味する。後者は、端的に言えば、「両極端」を足して2で割れば「中立である」とする素朴なバランス感覚である。「イラク戦争」の従軍報道が明らかにしたように、「現地に行くだけではむしろ何も分からなかった」。砂嵐で苦勞する一人一人の若い米兵の顔には重要なメッセージが込められていた。しかし、気がついてみれば、従軍報道によって米軍の世界像が世界中を席卷したにすぎなかった⁸。また、「絵になる」ミサイル攻撃や差し迫った軍事作戦こそが「現実的」であるという誤解もまた「戦争」の全体像を見失わせた。さらに、たとえばアルジャジーラ放送と米国FOXテレビを同時に並列して放映することで「中立」を維持できると考えた日本の放送局は、結果的に「戦争」の不正義についてほとんど独自の分析を展開することができなかった。この「中立主義」の落とし穴は、マスメディアの宿命である。しかし、たとえば「動く歩道」のように、全体がひとつの方向に突き進んでいる時に、相対的な「中立」を保とうとするだけではもとの位置にとどまりつづけることはできない。ジャーナリズムが世界をみるための定まった視点を設定しようとするなら、むしろ流れに逆行するまでの「意志」が必要になるだろう。

「戦争」はもはや、その始まりも終わりのもマスメディアが定義するといっても過言ではない。「戦争」はどこかで観た広告や映画のように、一種の見世物（ショー）と化し、あらかじめ設定されたお決まりの「パッケージ」として洪水のように垂れ流され、消費される⁹。私たちは単に観客となって、さらに「現実」から隔てられ、ただそれに喝采を送ることを要求される。「民衆はか弱く、卑屈な人種であって自由に耐えられないし、真実を直視しえないから、彼らよりも強力な集団によって支配し、組織的にだまされねばならない」¹⁰。

イラク戦争が何よりも広い意味でのことばの喪失であったことは、ブッシュ政権が大義なき戦争に異議を申し立てたフランスやドイツを「古いヨーロッパ」と断定し、それを歴史的な逆戻りだと嘲笑した事実にも表れている。もちろん「古いヨーロッパ」は、伝統的に武力の行使を決して否定しない。むしろ武力がもつ固有の役割を明確に意味づけてきた。しかしその武力は、常に最低限、ことばに基づく政治や外交の延長線上にかろうじてつなぎとめられてきた。ヨーロッパの歴史において「戦争」は、同時に人間の生存をめぐる思想的な問題でもあった。しかし、イラク戦争の圧倒的な武力は、むしろ思想やことばの無化にこそ、その力の基盤をおいていたのである。「善意の帝国」が嘲笑したのは、歴史の地層に練りこまれた幾多の戦火や植民地経営の困難な経験であり、「世界には対話をすべき他者が存在する」という成熟した世界認識であった¹¹。「ネオコン」が夢見るように、もはや世界は武力によって自由にデザインできるようになったのだとすれば、今回確かに、

7 佐々木寛・小柏葉子「巻頭言 新世紀の平和研究—変わらない課題と新たな挑戦」（日本平和学会編『平和研究』第26号 2001年）

8 Bill Katovsky and Timothy Carlson, *Embedded: The Media at War in Iraq*, The Lyons Press, 2003.

9 ボール・ヴィリリオ『幻滅への戦略—グローバル情報支配と警察化する戦争』（河村一郎訳 青土社 2000年）

10 ジョージ・オーウェル 前掲書 P.343.

11 佐々木寛「イラク戦争と『安全保障』概念の基層—「ヨーロッパ」再考」（古城利明編『世界システムとヨーロッパ』中央大学出版部 2005年）

「古いヨーロッパ」は時代遅れになったのである。

「希望」のありか

しかし、「戦争」は、はたして本当に制御不能な機械のようにグローバルに自己目的化し、人間の営みとしての政治の力を完全に奪い去ってしまったのだろうか。

米英軍によるイラク空爆の最中、世界中で1千万人以上の人びとが広場に出て「それはいけない」とうったえた。またある者は、身を挺して空爆を止めようとイラクに駆けつけた。戦時中のこのようなふつうの市民によるこれほど大規模な意思表示は、人類史上はじめてのできごとだった。「戦争」というもっとも暗い事実の中で、「殺す側」ではなく、「殺される側」に立った無数の人びとが国境をこえてつながった¹²。

この大きな運動のうねりに対して、現在なげかけられている2つの大きな疑念について検討してみたい。ひとつは、その参加者たちの動機や資質を問うものである。たとえば、これまでの「平和運動」では見られなかった若者たちの素朴なアピール方法を見て、そこに軽薄な動機や未熟な感情論、「運動」を一種のブームとして消費した「大衆」の姿を読みとることも可能であるかもしれない。「世論は間違えることもある」（小泉首相）。しかし、今回「いてもたってもいられず」「はじめてデモに参加した」個々の人間の動機に分け入ってみれば、それを単に「軽薄だ」と片づけることこそが知的に軽薄であるかもしれない。「殺されたくもないし、殺したくもない」「今度の戦争を許したら、自分の中の何か大切なものが壊される気がした」という、生命や生活の実感に根をはった「戦争反対」の声をどのようにみるべきか。それは現在、ことばと思想の枯渇を克服するためにもっとも大切な知的課題ではないか。私が住む新潟の小さなデモで、ハンドマイクをもった若い学生が、「ええと、何ていうか、ばくもいろいろ迷っているのですが…」と沿道の人々に語りかける姿は、ごくちなかったが、むしろ新しい可能性を感じさせた。そこには、他者とともに、まっとうに生きる方法（思想）をあみだそうとする人間の真実性があつた。

こういった「平和運動」に対するもうひとつの疑念は、それは結局、米英の攻撃の前には無力だったのではないかというものである。確かに米英の攻撃を押しとどめることはできなかった。そしてそれは、とくに反対の声をあげた市民にさらなる無力感をもたらしした。しかし「運動」を正しく評価するためには、断続的に表面に現れる事実や影響力だけでなく、それが形成される地下水脈にも目を向けなければならない。今回生まれた人びとの連携は、また静かに新たな連携を育んでいる。それゆえ、終わることのない「対テロ戦争」には、今後さらに大きな市民的抵抗が間断なく展開するだろう。そもそも今回のグローバルな「同時多発デモ」は、90年代に成長した「反グローバリズム」の潮流ぬきには説明することができない。その意味で、ブッシュ大統領は、歴史的にはパンドラの箱を開けてしまったのかもしれない。そして、この露骨な覇権主義に反対する大きな「国際世論」のうねりこそが、今回少なくとも米英軍に可能な限りの早期の「戦争終結」をせまったのである。

前述したように、現在「戦争」の本質は、急激に「情報＝ソフト化」している。その意味で「戦争」は、純粹な有事の戦闘行為を観察するだけでは十分分析できなくなっている。実際の武力行使そのものよりもむしろ、事前事後を通じた当該「戦争」の「正当性（legitimacy）」をめぐる抗争、つまりその「戦争」を「正当である」と国内外に信じこませることができるかどうか、に争点が移行しつつある。そしてもしそうであれば、「国際世論」は今後も新しい戦場でありつづけるにちがいない¹³。そしてそれは、武力をもたず、ことばの力で世界に関わろうとする民衆にとって、一種の福音となるかもしれない。第1に、マスメディアによって分断されることなく、多様性に満ちたリアルな世界像をとりもどすこと。第2に、「民衆」の立場から再度、「安全」や「危険」や「脅威」などの基礎概念を再定義し、武力をコントロールするための、そして自らを守るための原理を立ち上げてゆくこと。第3に、それを公的な「国際世論」の場で明らかにし、新たな制度をつくりあげてゆくこと。これらが可能になれば、覇権主義のペシミズムにうちかつ「希望」を見出すことができるかもしれない。

¹² David Cortright, *A Peaceful Superpower: The Movement against War in Iraq*, the Fourth Freedom Forum, 2004.

¹³ 佐々木寛「『戦争』を再考する」（岡本三夫・横山正樹編『平和学のアジェンダ』法律文化社 2005年）

〈他者〉とともに「希望」を語ることは可能であろうか。確かなことは、〈他者〉の声をかき消してしまう空爆やミサイルなどによっては、決して「平和」や「民主主義」はもたらされないということである。「善意の帝国」の試みはかならずや失敗するだろう。確かに、暴力は一瞬にして「希望」を打ち砕くことはできる。しかしそれをつくり出すことは決してできない。

また一方で、私たちは、すでにこれまでたくさんの「平和のつくり手」が存在してきたことも知っている。競争社会や差別によってはじき出された「弱者」や「のけ者」の声を聞き逃げ、彼らと共に生きようとしてきた無数の人びとがいる。ことばや芸術の力を信じて、社会や世界に語りつづけてきた人びとがいる。それぞれが一步一步、迂遠に見えながら、日々確実に「平和」を構築しつづけてきた。まずは、彼らにならって、世界の片隅に息づく「声なき声」に耳をすますことから始めたい。明らかに、それが、「グローバルな全体主義」の濁流の中で正気を保ち、これに抗う唯一の方法である。

※ 本稿は『私学公論』第226号「特集：戦争よおごるなかれ」掲載の論稿「武力とことば」を大幅に加筆修正したものである。「武力とことば」は、ブッシュ大統領によるイラク戦争終結宣言の直後に書かれたが、あれから約4年たっても問題の本質は全く変わることがない。安倍政権はすでにイラク復興支援特別措置法を2年間延長することを決定し、この大義なき戦争にどこまでも追従する姿勢である。大きな歴史の中でアクチュアルに構想を展開するという意味での「政治」は、この国ではすでに死に絶えている。

3月20日 イラク戦争開戦4周年の日に。